

動物園

芥川龍之介

青空文庫

象

象よ。キツプリングは昔お前の先祖が、鰐わにに鼻を啣くはへられたものだから、未だいまにお前まで長い鼻をぶら下げて歩いてゐると云つた。が、おれにはどうしても、あいつの云ふ事が信用出来ない。お前の先祖は仏陀ぶつだ御在世ごさいせいの時分、きつとガンヂス河がはの燈心草とうしんぐさの中で、昼寝か何かしてゐたのだ。すると河の泥に隠れてゐた、途方とほうもなく大きな蛭ひるが、その頃はまだ短かつた、お前の先祖の鼻の先へ、吸ひついてしまつたのに違ひない。さもなければお前の鼻が、これ程大きな蛭ひるのやうに、伸びたり縮ちぢんだりはしないだらう。象よ。お前は印度インドの名門の生れだ。どうかおれの云つた通り、あのキツプリングの説などは口から出で放題だいの大法螺おほぼらだと、先祖の冤えんを雪すすぐ為に、一度でも好いいからその鼻をあげて、喇叭らっぱのやうな声を轟かせてくれ。

鶴こふとりの鳥

あの頸くびをさ、襟ネクタイ飾のやうに結むすんでしまつたら、一体あいつはどうしてほどく気なんだらう。

駱駝らくだ

お爺ぢいさん。もう万年青の御手入おていれはおすみですか。ではまあ一服おやりなさい。おや、あの菖蒲しょうぶ革がわの蓑入たばこは、どこへ忘れて御出でなすつた？

虎

虎よ。お前はコスモポリタンだ。豊干ぶかん禪師ぜんじを乗せたお前。和唐わとう内に搏うたれたお前。それからウイルヤム・ブレエクの有名な詩に歌はれたお前。虎よ。お前は最大のコスモポリタンだ。

家鴨あひる

子供が黒板へ白墨で悪戯に書いた算用数字。2、2、2、2、2、2、2。

しろくじやく
白孔雀

これは年とつた貴婦人だ。お眼が少し赤く爛れていらつしやる。鼈甲の柄のついた眼鏡を持つて、一々見物人を御覧になれば好い。

おほかうもり
大蝙蝠

お前の翼は仁木弾正の鬢だ。面明りの蠟燭位は、一煽りにも消し兼ねない。さうしたら、鼻の尖つた、眼張りの強い、唇をへの字に曲げてゐる顔が、うす暗い雲母摺を後にして、愈気味悪く浮き上るだらう。落款は東洲斎写楽……

カンガルウ

腹の袋の中には子供が一匹はひつてゐる。あれを出してしまつても、まだ英吉利の国旗
か何かが、手品のやうに出て来はしないか。

鸚哥

お前は古い唐画の桃の枝に、ぢつと止つてゐるが好い。うつかり羽搏きでもしようも
のなら、体の絵の具が剥けてしまふから。

猿

猿よ。お前は一体泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐるのか。お前の顔は悲劇の面の
やうで、同時に又喜劇の面のやうだ。おれの記憶は縁日の猿芝居へおれを連れて行く。
桜の釣板、張子の鐘、それからアセチレン瓦斯の神経質な光。お前は金紙の烏帽子を
かぶつて、緋鹿子の振袖をひきずりながら、恐るべく皮肉な白拍子花子の役を勤めてゐ

る。おれの胸に始めて疑團ぎだんが萌もしたのは、正にその白拍子たるお前の顔へ、偶然のいちべつ一瞥を投げた時だ。お前は一体泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐるのか。猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。おれはお前程巧妙なトラジツク・コメディアンを見た事はない。――おれが心の中でかう呟つぶやくと、猿は突然身を躍をどらせて、おれの前の金網かなあみにぶら下りながら、癩かんだか高い声で問ひ返した。「ではお前は？ え、お前のそのしかめ面つらは？」

さんせううを
山椒魚

おれがね、お前は一体何物だと、頭に向つて尋ねたら、私わたしは山椒魚さんせううをですよ、尻尾しつぽがおれに返事をしたぜ。

鶴

県下第一の旅館の玄関、芍薬しゃくやくと松とを生けた花瓶、伊藤博文いとうひろぶみの大字の額だいいじ、それからお前たちつがひの剥製はくせい……

狐

ふて寝だな。この襟卷め。

鴛鴦をしどり

胡粉ごふんの雪の積つた柳、銀泥ぎんでいの黒く焼けた水、その上に浮んでゐる極彩色ごくさいしきのお前たち夫婦、——お前たちの画工は伊藤若冲いとうわくちゅうだ。

鹿

この見事な刀掛かたなかけには、葵あふひの御紋散らしの大小でも恭しく掛けて置くが好い。

波斯猫ペルシャねこ

日の光、茉莉花まつりくわの匂にお、黄色い絹のキモノ、Fleurs du Mal, それからお前の手ぎはり。
 ……

鸚鵡あうむ

鹿鳴館ろくめいくわんには今日けふも舞踏がある。提灯ちやうちんの光、白菊しらぎくの花、お前はロテイと一しよに踊った、美しい「みやうごにち」令嬢だ。

日本犬

造り物の柳に灯入ひりの月が出る。お前は唯遠くで啼いいてゐれば好いい。

南京鼠ナンキンねづみ

上着は白天鷺絨、眼は柘榴石、それから手袋は桃色繻子。——お前たちは皆可愛らしい、支那美人にそっくりだ。後宮の佳麗三千人と云ふと、おれは何時もお前たちが、重なり合つた楼閣の中に、巢を食つた所を想像する。そら、西施が芋の皮を嚙じつてゐると、楊貴妃は一生懸命に車をまはしてゐるぢやないか。

猩猩
々々

あの猩猩々の鼻の上には、金縁の Pince-nez がかかつてゐる。あれが君に見えるかい？ もし見えなければ、今日限り、詩を作る事はやめにし給へ。

鷺
さぎ

祥瑞の江村は暮れかかつた。藍色の柳、藍色の橋、藍色の茅屋、藍色の水、藍色の漁人、藍色の芦荻。——すべてが稍黒ずんだ藍色の底に沈んだ時、忽ち白々と

舞ひ上るお前たち三羽の翼の色。――皿の外までも飛び出さなければいいが。

河馬

挙す。梁の武帝、達磨大師に問ふ。如何か。是仏法。磨云ふ。水中の河馬。

ペングイン

お前は落魄した給仕人だ。悲しさうなお前の眼の中には、以前勤めてゐたホテルの食堂が、今も Aurora australis のやうに、輝かしい過去の幻を浮き上らせる事がありはしないか？

馬

厩の吹く町の角には、青銅のお前に跨つた、やはり青銅の宮殿下が、寒むさうな往

来^{うらい}の老^{らう}若^{にやく}男^{なん}女^{によ}を、揚々と見^み下^{おろ}して御^お出^いでになる。さうしてその宮^{みや}殿^{でん}下^かの、軍服を召^めした御^お胸^{むね}には、恐^{おそ}れながら白^{しろ}い鴉^{からす}の糞^{ふん}が、……

ふくろふ
梟

Brocken 山^{さん}へ！ 箒^{はうき}に跨^{また}つた婆^{ばあ}さんが、赤い月のかかつた空へ、煙突から一^{いち}文^{もん}字^じに舞^まひ上^{あが}る。と、その後^{うしろ}から一羽^{ふくろふ}の梟^{ふくろふ}が——いや、これは婆^{ばあ}さんの飼^いひ猫^{ねこ}が何^い時^つの間^まにか翼^{よく}を生^なやしたのかも知^しれない。

金魚

うす日の光がさして来ると、藻に立つた秋も目立つやうになつた。おれは、——所^{ところ}々^{ところ}鱗^{りん}の剥^はげた金魚は、やがてはこの冷たい水の上に、屍^{むくろ}を曝^{さら}す事になるのかも知^しれない。しかしさう云ふ最後の日までは、やはり先の切れた尾を振りながら、あの洒^{しやれ}落^れ者^{もの}のブラムメルのやうに、悠々と泳いでゐようと思ふ。

兎

今昔物語こんじやくものがたり巻五まきのご、三獸行さんじうぼさつ菩薩道ぼさつだう兎う焼身やくみ語ものがたりと云ふ〔Ja_taka〕の中に、こんなお前の肖像画がある。――「兎は励みの心をおこ発して、……耳は高くくぐせにして、目は大きく前の足短く、尻の穴は大きく開いて、東西南北求め歩けども、更に求め得たるものなし……」

雀

これは南画なんぐわだ。蕭々せうせうと靡なびいた竹の上に、消えさうなお前あがが揚つてゐる。黒ずんだ印いんの字を読んだら、大明方外たいみんはうがい之人のひととしてあつた。

麝香獸じゃかうじう

梅紅羅の軟簾の中に、今夜も独り眠つてゐる、淫婦潘金蓮の妖しい夢。

かはをそ
獺

毎晩廊下へ出して置く、台の物の残りがなくなるんですよ。獺が引いて行くんですつて。昨夜も舟で帰る御客が、提灯の火を消されました。

くろへう
黒豹

お前は齒の美しい Black Mary だ。南京玉の首飾りや毛糸の肩掛を持つて行つてやつたら、さぞ喉をならして喜ぶだらう。

あをさぎ
蒼鷺

何でも雨上りの葉柳の匂が、川面を蒸してゐる時だった。お前はその柳の梢に、たつ

た一羽止まつてゐたが、「夕焼け、小焼け、あした天気になあれ。」——そんな唄を謡つて通つた、子供の時のおれを覚えてゐるかい？

栗鼠^{りす}

亜欧堂田善^{あおうだうでんぜん}の銅版画^{どうばんぐわ}の森が、時代のついた薄明りの中に、太い枝と枝とを交はしてゐる。その枝の上に蹲つた、可笑しい程悲しいお前の眼つき……

鴉^{からす}

「今晚は。」「今晚は。この竹藪は風が吹くと、騒々しいのに閉口します。」「ええ、その上月のある晩は、余計^{よけい}何だか落着きませんよ。——時に隱亡堀^{おんぼうぼり}は如何^{いかが}でした？」「隱亡堀ですか？ あすこには今日も不^{けふ}相^{あひ}変^{かは}らず、戸板に打ちつけた死骸がありました。」「ああ、あの女の死骸ですか。おや、あなたの嘴^{くちばし}には、髪の毛が何本も下つてゐますよ。」

ジラフ

これは玩具だ。黄色い絵の具と黒い絵の具とが、まだ乾かずにべたべたしてゐる。尤も人間の子供の玩具には、ちつと大きすぎるかも知れない。さしづめあの小ましくくれた、幼児、基督の玩具には持つて来いだ。

金糸雀

理髪店の店さきには、朝日の光がさわやかに、万年青の鉢を洗つてゐる。鋏の音、水の音、新聞紙を払げる音、——その音の中に交じるのは、籠一ぱいに飛びまはる、お前たちの囀り声、——誰だい、今親方に挨拶した新造は？

羊

或日おれは檻の羊に、いろいろな本を食はせてやつた。聖書、Une Vie, 唐詩選、——

何でも羊は食つてしまふ。が、その中にたつた一つ、いくら鼻の先へ出してやつても、食はない本があると思つたら、それはおれの小説集だつた。覚えてゐろよ。綿細わたざいく工め。

(大正九年九月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

動物園

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>